

日本家畜管理学会・応用動物行動学会合同 2009年度秋季シンポジウムおよび現地検討会報告

河合 正人 (帯広畜産大学)

はじめに

2009年9月30日(水)～10月2日(金)の日程で、日本家畜管理学会・応用動物行動学会合同2009年度秋季シンポジウムおよび現地検討会が、日本最西端の離島、与那国島において開催された。内容は「南西諸島における家畜生産システム」をテーマとしたシンポジウム、小学生による与那国馬の乗馬実演見学と、牛馬を混牧飼養しているシバ型草地、肉牛および闘牛飼養施設の視察、懇親会などであり、参加者は20名であった。私は本シンポジウムおよび現地検討会の特認幹事を仰せつかった経緯から、その内容についてはすでに応用動物行動学会ニュースレターで報告したが、ここには一部を修正、加筆して報告させていただく。

シンポジウム

第1日目(9/30)は正午に与那国空港に到着、昼食後、離島振興総合センターにおいてシンポジウムが開催された。シンポジウムのテーマは「南西諸島における家畜生産システム」であり、琉球大学の平川守彦先生に進行をお願いして4名の講師の方々にご講演いただいた。

まず与那国馬保存会事務局長の前楚和秀氏には



シンポジウム講師の方々

「与那国馬の現状について」と題し、保存会設立の経緯から現在の主な活動内容、DNA鑑定やマイクロチップの埋め込み、凍結精液の保存といった与那国馬の個体識別および個体管理に関する取り組みと今後に向けての課題などについてお話しいただいた。続いて元与那国町役場職員の前富里公一氏には「与那国島における畜産と与那国馬」についてお話しいただき、戦後の洋種肉牛や馬の導入、役畜としての水牛や現在の和牛導入と与那国馬の飼養管理、飼料調製や草地造成まで、与那国生まれ与那国育ちの前富里氏ならではの、正に与那国島の畜産の歴史について詳しく聞くことができた。

後半はNPOヨナグニウマふれあい広場の佐野恵子場長と久野雅照代表に、それぞれ「与那国馬の活用」、「与那国馬の将来の展望」についてご講演いただいた。お二人とも島の出身ではなく、与那国島のすばらしさ、与那国馬のすばらしさに魅せられて本州から移り住んだ方々で、ふれあい広場の概要と、与那国馬の保存と活用の両立、とくにヒトとウマとのふれあいの場として「牧場」ではなく「広場」として活動しているスタッフの思いや将来の夢についても語っていただいた。

日本家畜管理学会もしくは応用動物行動学会が主催するこれまでのシンポジウムでは研究者からの話題提供が主であったが、今回は与那国の畜産や家畜に携わっている現場の方々を講師に迎え、正に生の声を聞くことができた。昔から島の畜産を支えてきた人々の考えと、新しく島の家畜に係わっていかようとする人々の考えが、それぞれ違いつつもうまくかみ合うことこそ重要であり、とくに与那国馬という小さな馬をとりまく両者の融合



シンポジウムの様子

によって、小さな島から大きな動きが始まろうとしていることがひしひしと伝わってきた。島や家畜に対する四者四様の非常に熱い思いは、日本家畜管理学会誌第45巻4号にすでに掲載されており、是非ご一読いただきたい。

現地検討会

小学生による乗馬実演と懇親会

シンポジウム終了後、比川小学校の校庭において青空乗馬チームによる乗馬実演を見学した。シンポジウムでの話題提供にもあったヨナグニウマふれあい広場の活動の一環として、比川小学校では動物介在教育として授業の中に乗馬やウマの管理など、ウマとの「ふれあい」が取り入れられている。9名の小学生と6頭の与那国馬による演技は本当にすばらしく、見知らぬおじさんおばさんの前で初めは少々緊張していたかにもえた子供達も、馬にまたがるととたんに凛々しく、また笑顔にもなって本当に楽しそうだった。演技終盤、久野氏から「皆さんにも是非乗っていただこう」との言葉で、上手に楽しそうにウマに乗る子供達をみていた参加者は、乗馬経験者も未経験者も皆その気になってワクワクし始めたが、その後突然のスコールが……。激しい雨の中、子供達は頑張ってウマとの演技を終えたが、我々が与那国馬に乗ることは叶わなかった。少々残念ではあったが、これは「再び島を訪れなさい」との天の声だと思い、



比川小学校青空乗馬チームと与那国馬の演技

近い将来、また与那国島を訪問した際の楽しみとしてとっておきたい。

どしゃ降りの雨でずぶ濡れの衣服を着替え、14頭の与那国馬を飼養管理している与那国馬ゆうゆう広場の二階、島中公民館での懇親会は、前楚氏、ふれあい広場スタッフ、ゆうゆう広場スタッフの皆さんが準備して下さった。カジキの刺身やヤシガニのスープ、与那国そば、クバ餅など島独特の



懇親会の様子



青年団による伝統舞踊

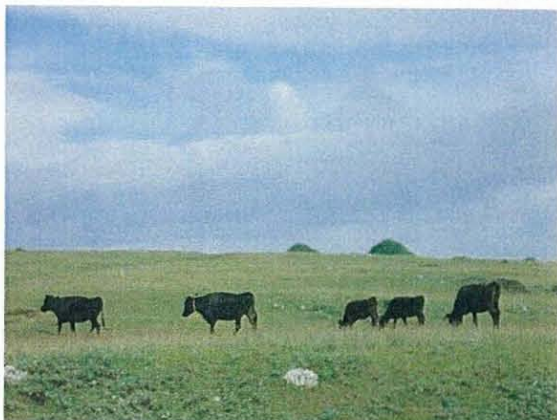
料理はどれも本当においしく、伝統舞踊もご披露いただき、また与那国泡盛も入っておおいに盛り上がった。シンポジウムでの討論時間が少なかった分、この懇親会では島の方々との話に花が咲き、予定の2時間の倍、4時間経って日付が替わろうとする直前まで交流を深めることができた。本当に楽しい懇親会で、ご準備いただいた皆さんに心より感謝いたします。

牛馬混牧のシバ型草地

第2日目(10/1)の午前中は日本最西端の碑がある西崎灯台に立ち寄った後、北牧場のシバ型草地を視察した。約90haに100頭前後の牛馬が周年混牧飼養されている北牧場には入り口にテキサスゲートが設置されており、和牛を眺める人、与那国馬の後を追って行く人、しゃがみ込んで植生を観察する人、そこかしこに落ちている牛馬の骨と記念撮影する人、馬鼻崎の雄大な景色や岸壁下を泳ぐ海ガメの姿を楽しむ人など、参加者それぞれの興味にあわせて約1時間自由に歩き回った。



日本最西端の地にて参加者全員で



黒毛和牛と与那国馬を周年混牧飼養している北牧場のシバ型草地

泡盛の酒造所を見学、原酒などの試飲も楽しみ、世界最大の蛾、ヨナクニサンが展示されているアヤミハビル館にも寄って少々観光気分も味わった後、東牧場内にある東崎展望台で昼食をとった。テキサスゲートで区切られた約60haの東牧場にも与那国馬が周年放牧されており、ここで1時間ほど休憩を兼ねて展望台からの景色や放牧馬の様子などを自由に楽しんだ。



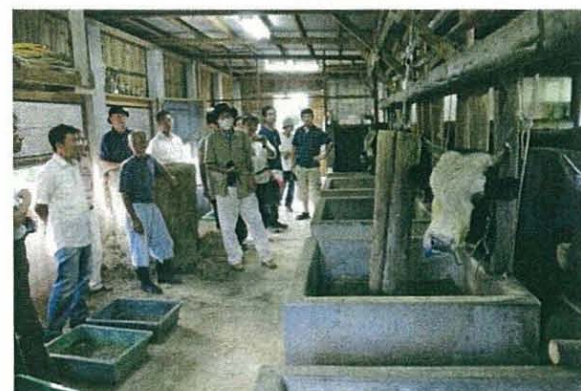
東牧場の与那国馬放牧風景とテキサスゲート



真嘉牧場の視察



大嵩牧場の視察



入福浜氏の闘牛とその飼養施設

肉牛農家と闘牛飼養施設

午後からは、2軒の肉牛農家を見学させていただいた。与那国の肉牛農家はどこも和牛の肥育素牛生産で、約300日齢で270～280kgまで育成した後、主に石垣島まで船で輸送し出荷する。最初に訪れた真嘉牧場では約130頭の繁殖雌牛を飼養、毎年100頭程度の子牛を生産しており、そのうち10頭を自家更新にあてている。20haの採草地はローズグラスおよびギニアグラス主体で、年間5～7回の刈り取りでロールバール乾草を2,500～3,500個調製

していた。人工授精はご自身で行っているが、2～3回で受精しなかった1割程度についてはその後まき牛、分娩は屋外パドック（草地）、また船での輸送の影響を軽減するため出荷1ヶ月前の8～9ヶ月齢から石垣で預託していることなどが特徴であった。

次に訪問した大嵩牧場では、約50頭の繁殖雌牛を飼養、そのうち30頭程度を舎飼い、残りは2ha

の草地で放牧している。5haのジャイアントスターグラス主体採草地では、やはり年間5～7回の刈り取りを行っているが、貯蔵庫の許容量の問題から、屋外で貯蔵できるよう一度調製したロールペール乾草をラップにしていた。濃厚飼料価格高騰のため20kgの配合飼料に対して60kgのフスマを混合して給与すること、また出生後2ヵ月齢までは母子一群で飼養するが、それ以降は朝夕2回のみ授乳させる以外は別群として飼養管理していることなどが特徴であった。

小休止をはさみ、闘牛場としても利用されるイベント広場と闘牛飼養施設を見学させていただいた。与那国では毎年2～3回闘牛大会が開催されており、約1ヵ月後にも大会をひかえているために闘牛の試合はみることができなかつたが、肉牛生産を行いながら闘牛を5頭飼養している入福浜賢氏に色々な楽しいお話を聞くことができた。飼料の種類や給与方法、とりわけ大会前の特別な調製メニューやトレーニングの方法などについては、闘牛を飼養されている方それぞれの経験に基づいた考えがあり「極秘」なのだそうだが、大会で勝利した後の酒宴で泡盛が入ると皆さん饒舌になって話してしまうとのこと。このようなお祭りも、島の文化とともに畜産を支えている重要な要素であり、是非次回は闘牛大会の日程に合わせて島を訪問したいものである。

最後に

本シンポジウムおよび現地検討会開催にあたり、琉球大学の川本康博先生には企画段階から大変なご協力、ご助言をいただきました。また全面的な準備に加え与那国にご同行いただいた平川守彦先生、講演に加えて視察先の調整などでもご尽力いただいた前楚和秀与那国馬保存会事務局長のおかげをもちまして、無事に終了することができました。特認幹事を仰せつかった私自身も非常に充実した2泊3日の行程を楽しむことができ、ここにあ

らためて深謝致します。さらに、ヨナグニウマふれあい広場の久野代表、佐野場長をはじめスタッフの方々、前富里氏、見学・視察を快く受け入れていただいた真嘉氏、大嵩氏、入福浜氏、比川小学校青空乗馬チームの子供達、その他お世話になったたくさん島の方々にも、心より御礼申し上げます。

今回は私にとって2度目の与那国島訪問でしたが、前回以上に有意義で、今後何度でも行きたいと思える非常に楽しいものでした。この報告が、北国在住の北海道家畜管理研究会会員諸氏がこの先南国与那国を訪れるきっかけのひとつにでもなれば幸いです。